パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査報告4

高橋龍三郎・細谷　葵・井出浩正
根岸　洋・中門亮太

はじめに

私たちがはじめてミルン・ベイ州を訪れたのは、二〇〇五年八月のことである。イーストケープからボートに乗り込み、少し大げさな言い方かもしれないが、波濤に弄ばれるように二時間をかけて五キロメートルはなれたヤバム島にたどり着いた時であった。ヤバム島には、イーストケープと血縁関係をもつ多くの人々が住み、彼らはヤムやタピオカの生産や漁労活動によって生計を立てながら生活をしている。その中で一人の老女が土器作りを行い、しかもその土器が本島のイーストケープの土器とまったく同じ形態、文様構造、文様の種類を持ちながら一定の分布範囲で広がっており、縄文式土器と等しく土器型式が成立しているのに驚かされた（高橋他　二〇〇六）。メイヤーとタクソンの研究によると、それらは「イーストケープ伝統」の土器である（May and Tuckson 1982）。聞くと、老女はかつてイーストケープに在住したことがあり、しかも若いころにはそちらで土器作りをしたばかりか、娘などにも土器作りを教えたことがあるという。娘たちは本島に在住して土器を作っているのである。また彼女と親族関係にある女性たちとも交友関係を結び、土器作りに関する多くの情報を交換していたのであった。私達は、ヤバム島とイーストケープ地方に展開するイーストケープ伝統の土器型式がどのように生み出され、途中でどのようなメカニズムを経て、地域的に分布するのかを研究する絶好の機会に恵まれたので

ある。これは縄文土器型式の分布を考える上で大変重要な示唆を与えてくれる。しかも、大きな波濤を越えなくては渡れない島との交流を通じて、本島と同じ型式が共有され、面的に分布する要因を行動学的側面から、また社会的側面から研究することができるのである。

そのような学術的関心のもとで、私達は二〇〇六年八月五日より二週間の期間で第二回目の調査を実施した。比較のためには、ヤバム島と本島のイーストケープの両地域を研究して比較する必要がある。そのような理由から、調査はヤバム島と本島のイーストケープ地方に分かれて実施した。高橋と中門は本島に残ってイーストケープ地方の親族・村落構造と土器資料の把握に努めた。また井出と根岸、細谷、千田はヤバム島に渡り、農耕や漁労活動、親族・村落構造、土器資料の把握に努めた。本稿はその折に実施した調査内容について報告する。

（高橋龍三郎）

1．二〇〇六年度の調査概要

二〇〇六年度は八月五日から八月一九日にかけてミルンベイ州イーストケープとその周辺域の調査を行った。該地はパプアニューギニア国の主要国土であるニューギニア島の南東端にあたり、パプアニューギニアの地理的区分によれば島嶼部に括られる。そのため、ニューギニア本島にありながら雨季と乾季がそれと逆転しており、我々の調査時点では雨季の最中にあたる。

二〇〇六年度調査は二〇〇五年度の調査と踏襲しつつ、新たにイーストケープ周辺の調査を行った。二〇〇五年度はイーストケープより東に約一〇キロメートルに位置するヤバム島のみを調査対象としていたが、該地の調査によって、イーストケープ一帯の悉皆調査を行う必要が生じた（高橋他　二〇〇七）。そのため、二〇〇六年度は調査班をイーストケープ一帯の調査班とヤバム島を中心とする島の調査班の大きく二つに分け、前者を高橋龍三郎と中門亮太が、後者を細谷葵、井出浩正、根岸洋、千田麗紗子が担当した。また、後者は、特に細谷と千田が親族調査と植物利用に関する調査中心に行い、井

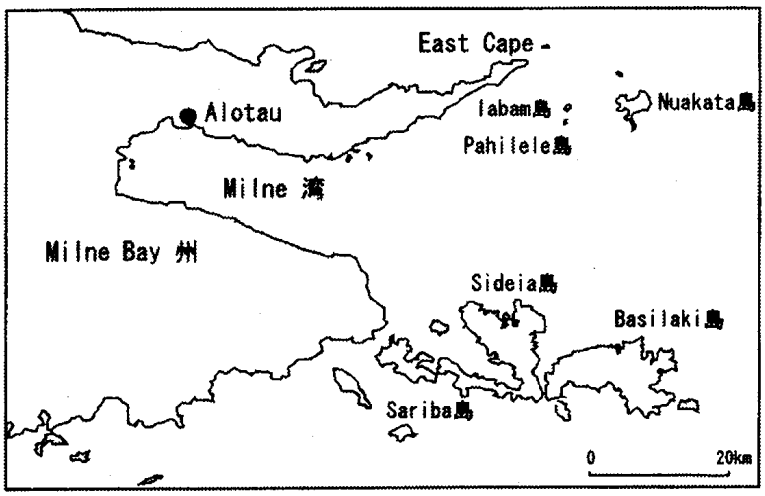


図1

出と根岸が親族調査と土器調査を行った。これらを含め、調査行程については表1を参照頂きたい。（井出浩正）

表1

日付	行程・調査内容	調査地
8月5日	成田空港よりニューギニア航空（国際線）にてパプアニューギニア首都ポートモレスビーのジャクソン国際空港へ。	
～ 8月6日	ジャクソン国際空港より空路国内線でミルンベイ州アロタウのガーニー空港へ。アロタウにて朝食後、陸路イーストケープへ。 〔高橋・中門〕Bagumani 村で調査開始 〔細谷・井出・根岸・千田〕イーストケープより海路ヤバム島へ	 Bagumani Iabam
8月7日	〔高橋・中門〕Dulia にて親族および Toleha の準備実見 〔細谷・千田〕各戸の親族調査 〔井出・根岸〕各戸の親族調査	Dulia/Hanakayawa Iabam Iabam
8月8日	〔高橋・中門〕土器製作関連調査、Dulia Clanの親族調査、East Cape 地方の村落名の聞き込み 〔細谷・千田〕GPS による各戸の焼畑計測 〔井出・根岸〕各戸の親族調査・土器調査	Dulia Iabam Iabam
8月9日	〔高橋・中門〕粘土採掘坑の調査、土器作り実見、*Dulia Clan* の親族調査など 〔細谷・千田〕各戸のヤムハウス計測・焼畑計測 〔井出・根岸〕各戸の親族調査・土器調査	Dulia Iabam Iabam
8月10日	〔高橋・中門〕GPS を用いた半島の踏査 Bagumani における Toleha 実見など 〔細谷・千田〕各戸のヤムハウス計測・焼畑計測 〔井出・根岸〕各戸の親族調査・土器調査	Bagumani Iabam Iabam
8月11日	〔高橋・中門〕GPS を用いた半島の踏査・土器調査 〔細谷〕村民と同行調査 〔井出・根岸・千田〕土器製作の観察と聞き取り	East Cape Iabam Iabam
8月12日	〔高橋・中門〕調査前半の整理、土器焼成の実見 土器製作者の親族調査 〔細谷・千田〕各戸の親族調査・漁労に関する調査 〔井出・根岸〕各戸の親族調査・土器調査	East Cape Iabam Iabam
8月13日	〔高橋・中門〕Bagumani で聞き取り調査 GPS を用いた半島の踏査、土器調査 〔細谷・千田〕植物資料採取とデータ作成 〔井出・根岸〕土器調査	East Cape Iabam Iabam
8月14日	〔高橋・中門〕Bagumani での土器作り実見・土器調査 GPS を用いた半島の踏査 East Cape の村の歴史に関する聞き込み 〔細谷・千田〕水路パヒレレ島へ・島内の基礎データ収集（地図） 〔井出・根岸〕水路パヒレレ島へ・各戸の親族調査・土器調査	Bagumani Pahilele Pahilele
8月15日	〔高橋・中門〕GPS を用いた半島の踏査 Dulia にて聞き込み（過去の土器作り、Toleha、Bagumani・Wari との関係など） 〔細谷・千田〕水路パヒレレ島へ・島内の基礎データ収集（地図） 〔井出・根岸〕水路パヒレレ島へ・各戸の親族調査・土器調査	East Cape Pahilele Pahilele
8月16日	〔高橋・中門〕ボートによる村の遠景撮影 〔細谷・千田〕各戸の親族調査 〔井出・根岸〕土器調査	East Cape Iabam Iabam
8月17日	〔高橋・細谷・井出・根岸・中門・千田〕 アロタウのユナイテッド・チャーチにて聞き取り、マーケット	Alotau
8月18日	〔高橋・細谷・井出・根岸・中門・千田〕 アロタウより空路ポートモレスビーへ。パプアニューギニア国立博物館見学	Port Moresby
8月19日	〔高橋・細谷・井出・根岸・中門・千田〕 ポートモレスビーのジャクソン国際空港より空路にて成田空港へ	

2. 二〇〇六年度ヤバム島の調査

二〇〇六年度の調査は、二〇〇五年度のヤバム島におけるヤムハウス（高床式のヤムイモ貯蔵施設）を中心とした生業の調査（高橋　二〇〇七、七九―八六頁）を、より幅広い生業の調査に発展させる形で実施した。まず食料生産手段である焼畑農耕について、それをめぐる土地所有や相続の問題、日々の生活スケジュールまで含めて聞き取り調査を行った。また、ヤバム島と地理的にも社会的にも近い関係にあるパヒレレ島でも焼畑の調査やヤムハウス調査を行い、ヤバム島との比較調査を試みた。なお、文中のインフォーマント名は、高橋ほか（二〇〇七）に準じたアルファベット表記とした。

（1）焼畑と日々の生活について

①　土地の所有と使用権、相続

二〇〇六年度調査では、まず焼畑を中心とした土地利用についての聞き取り調査を実施した。インフォーマントは主にヤバム島民である。結果、土地の所有と利用の権利には、いくつものレベルがあることがわかった。

土地の所有については、ヤバム島の土地所有者は四人いる。まず、インフォーマントによれば三百年近く前、初めてこの島に移住してきた夫婦の三人の娘それぞれの直系の子孫であるJ、G（直系の女性の甥）、H（直系の男性の娘）。そして二世代前に、亡き父親を出自の土地に埋葬するためイーストケープから航海してきた人々がヤバム島に漂着し、島の者の許可を得て父親をヤバム島に埋葬させてもらって以来、住みついたものの子孫Cである。土地の所有者に関してはこの四筋の系統で決定されており、売買などで変化することはないようだ。なお、この地域は母系社会であるので、女性か相続権のある女性の甥が土地を受け継ぐのは正統だが、Hのように男系でつながるのは本来正統ではないため、彼女の死後は母親の所有するイーストケープの土地に埋葬されねばならない。そして土地は、血縁の女性に受け継がれる。しかし、もしHがヤバム島に埋葬されることを望む、あるいは天候の関係でイーストケープへ船が出せずヤバム島に埋葬された場合は、その見返りとして土地は他のヤバム島民たちのものになるという。

この土地所有の下のレベルとして、土地の永続使用権のようなものがある。たとえばBは、父親がヤバム島出身だというやはり男系のつながりで島に住んではいるが、父親がすでに「補償（compensation）」を済ませているため、彼女の子供たちが代々その土地を使い続けて住むことが可

能だという。ただし彼女が埋葬されるときは、やはり自分の母親が持つイーストケープの土地に埋葬されねばならないが、これも土地所有者との交渉しだいで変えられる。「補償」には、五万～六万キナ、場合によっては十万キナ以上の現金支払いおよび伝統的な食物による支払いが必要である。その額は、土地査定師が定める。

焼畑としての土地使用は、これらとはまったく別レベルである。土地所有者の誰かと交渉し、一定のブロックを使ってよいと許可さえもらえば、焼畑を作ることができる。とくに支払いも必要ない。そのかわりこの許可は流動的で、土地所有者の都合で断られることもある。本人限りで相続もできず、子孫に伝えるのは焼畑づくりのノウハウと、撒くべきタネ（タネイモや、バナナの接木など）だけだという。たとえば稲作社会であるバリ島の例（細谷　二〇〇七）のように、「水田」「畑」といった生産単位に財産として重きがおかれるのではないのが興味深い。ただし土地所有者であれば、優れた土地を選んで良い焼畑を作れることにはつながるようだ。島をひとまわりしても、上記の土地所有者たちの畑は広く、日当たりの良い草地などより畑を作りやすい場所に作られているのがわかる。

なお、今回パヒレレ島においては土地所有に関する調査まではできなかったが、ヤバム島以上に古くからの住人の直系の子孫が多い印象であったので、ぜひ今後の調査で土地所有についても理解を深めたい。

② 焼畑づくり

次に、焼畑づくりの手順について、ヤバム島にて聞き取り調査を行った。焼畑の位置と大きさは、土地の持ち主と交渉して使用が可能になった土地の中で土の具合のいい場所を選び、所有しているタネの量によって大きさを決める。焼畑は一年ごとに場所を移動し、ほぼ三～四年周期で元の場所を再び使うことができるので、使える土地の中で少なくとも三回はちがった場所が使える余裕があるようにも考えねばならない。

焼畑づくりは、草刈から始まる。これは男女が協力して行い、刈った草はその場で二週間ほど乾燥させる。草がじゅうぶんに乾燥したところで、火入れを行う。火入れは一日ですみ、燃やしている実質の時間は三十分から一時間ほどである。火入れはうまく畑にする部分のみ燃えるようにするが、失敗することもあり、かなり広く火が燃え広がってしまった例も目にした。土地に生えている木は基本的にそのまま残すが、枯れかけた木の場合燃やしてしまうこともある。火入れのあとは、燃えかすなどのごみの除去に二～三日を要する。土の表面がきれいになると、丸太を斜面

に対して横向きに並べていく。これは、土が滑り落ちていかないよう止める目的のものだが、家族の各人の持ち区画を示す役割を兼ねる場合もあるようだ。こうして畑の準備が整い、まずは男性が土を耕す。続いて女性が、土中に残った根の除去とタネ播きを行う。タネ播きは女性の仕事であるが、タロイモを植える場合のみ、男性が植えないとうまく育たないという伝承がある。タネ播きには掘り棒を用いる。作物の収穫は二日に一度程度行うが、タネ播きについては、収穫物の一部などを毎日少しずつ植え足し、作物を絶やさないようにする。雑草として最もよく生えるシダは、パプア・ニューギニアの一部では食用にすることもあるが、ヤバム島では食用にせず、二〜三ヶ月に一度除去する。焼畑づくりは基本的に血縁者に協力してもらって行い、その見返りとして収穫物を分ける。老女の一人暮らしのHの例では、畑づくりの初めの方の力仕事の部分のみ、イーストケープに住む息子が来てやってくれたという。

また、XやHの姪のように、島に住んでいないが畑のみ所有している人々もいるが、彼らは時おり島に来て一泊二日ほど島に住む血縁者の家に泊まり、畑の様子を見て、畑の面倒をみてくれる血縁者にその後の指示を出していくということだった。そして収穫の時期に来て収穫物は持ち帰り、島にあるヤムハウスにはタネイモのみを収納していく。後にも述べるように、ヤムハウスはタネイモ倉庫としての機能の方が大きいことが、ここにも表れている。

次に、栽培作物について、ヤバム島およびパヒレレ島にて観察した（表2、3）。ひとつの焼畑で栽培する植物は十種類前後で、その選択は持ち主が先祖から受け継いだタネの種類などから判断して決める。どちらの島においても、必ずヤムイモは含まれていた。また、二島を比較すると、パヒレレ島の方が土が良質のようで、畑もヤバム島より広めであり、作物の種類も多い。水分の多い土でなくてはできないのでヤバム島では栽培されていないタロイモや、根菜を食用にするゲマヒと呼ばれる作物など、パヒレレ島のみに見られる作物もあった。

主食的な位置をしめるイモ類のうち、もっとも耐性があるのはタピオカであり、島を出た人間（Y）が放棄していった畑にも、自然に育っているのが観察された。また、焼畑は一年間利用すると別の場所に移さなければならないが、古い畑の方もタピオカを植えて再利用している例を、両島でいくつか目にした。ヤムイモと異なり、養分が少なくなった土地でも育つ作物であることがわかる。二〇〇五年度にはヤバム島の住人たちに「好きな食べ物」と「大事な食べ物」を聞くという調査を試みたが、その際の結果は、「好きな食べ物」はタピオカ、「大事な食べ物」はヤムイモと

表2　ヤバム島の焼畑作物

畑の所有者	作物
M	ヤムイモ2種、パイナップル、バナナ、サトウキビ、アイビカ（葉野菜）、マメ
I	ヤムイモ、カボチャ、チリ、アイビカ（葉野菜）、'チューリップ'（葉野菜）、パパイヤ、バナナ
K	ヤムイモ、サツマイモ、バナナ、タピオカ、サトウキビ、アイビカ（葉野菜）
G	ヤムイモ、キャベツ、ピーナッツ、バナナ、アイビカ（葉野菜）、タピオカ、ジャガイモ、パイナップル
H	ヤムイモ、バナナ、パパイヤ、パイナップル、アイビカ（葉野菜）、チリ、キャベツ
E	ヤムイモ、バナナ、パパイヤ、パイナップル、アイビカ（葉野菜）、カボチャ、サトウキビ
牧師	ヤムイモ、バナナ、タピオカ、サトウキビ、アイビカ（葉野菜）、ジャガイモ、カボチャ

表3　パヒレレ島の焼畑作物

畑の所有者	作物
W	ヤムイモ、ジャイアントタロ、サトウキビ、タピオカ、パパイヤ、トマト、アスパラガス、ゲマヒ（根菜）、マメ、パイナップル、トウモロコシ
R	ヤムイモ、ジャイアントタロ、タピオカ、サトウキビ、パパイヤ、バナナ、アイビカ（葉野菜）、ゲマヒ（根菜）、ジャガイモ、パイナップル
P	ヤムイモ、タロイモ、ジャイアントタロ、タピオカ、アイビカ（葉野菜）、バナナ、パイナップル、サツマイモ

いう答えが多かった（高橋他　二〇〇七、八二頁）。今回パヒレレ島で同じ質問をしたところ、「大事な食べ物」がヤバム島と異なり、タピオカという答えが多かった。天候などの問題で他の作物が不作のときでも収穫が得られる、当てにできる食料だからだという。

③　一日のスケジュール

二〇〇五年度の調査から、ヤバム島における焼畑を中心とした生活サイクルは〝日〟ベースで動いており、日本の稲作社会などの〝年〟ベースで動くものとは異なるという仮説を立てた（高橋他　二〇〇七）。そして、同じ農耕を行う社会であっても、たとえばコメといった基本的にひとつの作物の栽培を主軸とする〝一様性栽培〟社会に対して、多様な自然資源と多様な食物を日々組み合わせて利用するヤバム島の社会は〝多様性栽培〟社会であるという見解を述べた。今回の調査では、この〝日〟ベースの生活サイクルのより深い理解を目指して、二つの世帯において一日のスケジュールについて聞き取り調査を行った。

［事例一］A・B夫妻

妻　午前　家の前の箒がけ→オトトワの井戸での水汲み→朝食作り→家族でともに朝食→焼畑での収穫、草取り、タネ播き→昼食作り

午後　昼食後、休憩→夕食作り

夫　午前　家の前の箒がけ→薪、ココナッツ集め→ココナッツの果肉をすりおろす、火をおこすなど、朝食作りの準備→カヌーで魚釣り→朝食→焼畑にて、木を切るなどの仕事

午後　昼食→（必要がある場合）住居を建てるなどの仕事→夕食

［事例二］牧師夫妻

妻　午前　家の前の箒がけ—オトトワの井戸での水汲み—焼畑での収穫、料理—焼畑での草取り—ゴザ編み

午後　ゴザ編み—焼畑でアイビカ（葉野菜）などの収穫—薪集め—料理、食事

夫　終日教会の仕事、時おり銛を使った魚捕りなど

これに加えて、女性は昼前の潮が引く頃に浜に出て、釣り針をつけた糸を投げて魚を釣る、浜近くにいるシャコ貝やタコをとるなどして、その日の食卓に供する。料理は、イモ類、バナナなどの炭水化物と魚、葉野菜（栽培または野生）を、ココナッツの果肉をしぼったココナッツミルクで煮るのが通常で、薪の火を使うので時間がかかる。

一般的な夫婦である事例一を見ると、焼畑の作物や野生のココナッツなど、その日食用にするものは基本的にその日のうちに調達しているのがわかる。牧師夫妻の事例二は、夫は牧師としての仕事があるという特殊な状況で、妻の仕事にも、彼女が夫とともに牧師学校に通った際に教えられたというゴザ編みが入るなどするが、食料調達の基本は同じである。二〇〇五年度に調査した、年に一回収穫・タネ播きを行うヤムイモを別としては、やはり〝日〟ベースで多様な資源を同時進行で利用する食料戦略がとられていることが確認できた。

④　まつり

ヤバム島・パヒレレ島ともに、葬式や結婚式といったもの以外のいわゆる「まつり」は現在行われていないということだが、教会での集会がその代替のような位置にあるようだ。今回の調査で滞在中に、ヤバム島・パヒレレ島合同の教会の集会を視察する機会があった。集会の数日前から、準備のために出来のいいヤムイモが集められ（写真1）、前日には両島の女性たちがヤバム島教会のキッチンに集まって料理をする。当日は午前中に礼拝が行われ、それから教

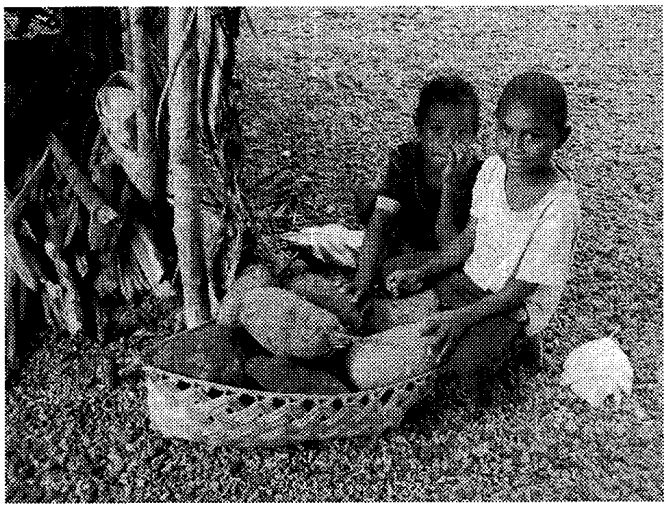


写真１　教会行事用ヤムイモ

会の庭で、メインイベントとも言えるような寄付の会が行われる。教会の世話人（O）が、ヤバム島・パヒレレ島の村の名前をひとつずつ読み上げると、その村に住む者やゆかりのある者が前に出て現金を寄付する。こうして集めた現金は、教会の運営費や、牧師の給料になるようだ。かなり長い時間をかけての寄付の会が終わると、料理してあったヤムイモやタピオカが供され、食事会となる。ヤムイモを中心とした共食は、島民によれば伝統的なまつりの形だと言い、またパプア・ニューギニア伝統文化の表象のひとつとしてアイコン化もされているものだが（細谷　二〇〇五）、キリスト教という新しい文化コンテクストの中にその「まつり」の形が取り入れられているのが興味深い。

（2）ヤムハウス

①　ヤバム島その後

ヤバム島におけるヤムハウスの状況は二〇〇五年度とほぼ同様であったが、二〇〇五年度に観察された七軒のうち、一軒がなくなっていた。昨年度はヤバム島教会の世話人（Caretaker）を任されていたO・Qの夫妻のもので、教会に牧師（Pastor）夫妻が赴任してきたので任を解かれ、パヒレレ島の自宅に引き上げたためである。O・Q夫妻が所有していたヤムハウスは、跡形もなく除去されていた。新しく来た牧師夫妻はまだ建てる時間がないということで、ヤムハウスを所有していなかった。来年あたり建てるかもしれないという。牧師の土地ごとの任期は三年である。牧師夫妻はイーストケープ出身で、そちらに自宅があり、休みのたびごとに戻るようだ。

二〇〇五年度の調査（高橋他　二〇〇七）では、ヤムハウスは特別視される食料ヤムイモを貯蔵する重要な施設であるが、施設そのものやその空間に観念的な意味づけがされるわけではなく、一～三年で簡単に廃棄されてしまうことがわかった。また、どちらかというとタネイモの倉庫としての機能が大きく、食料としてのヤムイモは収穫後数ヶ月で食べきってしまうので、恒常的に生活に関わる食料庫という意味合いは持たないことも観察できた。今年度のヤ

バム島の状況を見ると、島を去った夫妻のヤムハウスは完全になくなり、またヤバム島では三年のみの仮住まいである牧師夫妻がヤムハウスを建てる意向があるということで、ヤムハウスは一過的な施設であることがより浮き彫りになった。バリ島（細谷　二〇〇七）や奄美大島（胡桃沢　一九八七）に見られる高倉のような家屋の一部としての施設ではなく、ヤムイモ畑に伴う便宜的な施設と考えられ、同じ貯蔵施設でもまったく異なるカテゴリーに区分できる。

また、今年度調査では、千田麗紗子氏の協力を得て、ヤムハウスの計測を行った。ヤバム島のヤムハウスは皆ほぼ同じサイズだったが、前述した古くからの土地所有者の一人であるCのヤムハウスはやや大きく、建築スタイルも壁のついたやや手のかかったものだった（写真2）。ヤムハウス自体には社会的な意味づけはされないものの、そのサイズや造りなどが、所有する土地やヤムイモ畑の大きさを示すものとして、何らかのステイタスシンボルになっている可能性はある。また、二〇〇五年度の聞き取り調査では、ヤムハウスを集落内に建てる場合は、海沿いの公道に対して、住居の後ろに隠すように建てるという情報を得ていた。理由は、ヤムハウスを他人に見られるとヤムイモ畑を所有していることを知られてしまい、嫉妬されて魔術をかけられるからということだった（高橋他　二〇〇七、八三頁）。しかしこのCのヤムハウスの例では、公道側に他人から見えるように建てているのも特徴的であった。

写真2　Cのヤムハウス

②　パヒレレ島のヤムハウス

パヒレレ島では、三軒のヤムハウスおよび一軒の廃ヤムハウスを観察できた。このうち二軒は集落の中に、一軒と廃ヤムハウスは畑近くに建てられていた。集落の中の二軒は、ヤバム島の例のように他人の目から隠すようには建てられていないのが特徴的だった。特に、調査時に建築中だった、Sが所有するヤムハウスは、島の船着場の目の前の広場にとりわけ目立つように建てられており、島の外部から来る人間にもすぐ見えるような状況だった。またこのヤムハウスはサイズも並外れて大きい（写真3）。同じ島に住むSの娘たちのヤムイモも一緒に収納するので大きいのだ

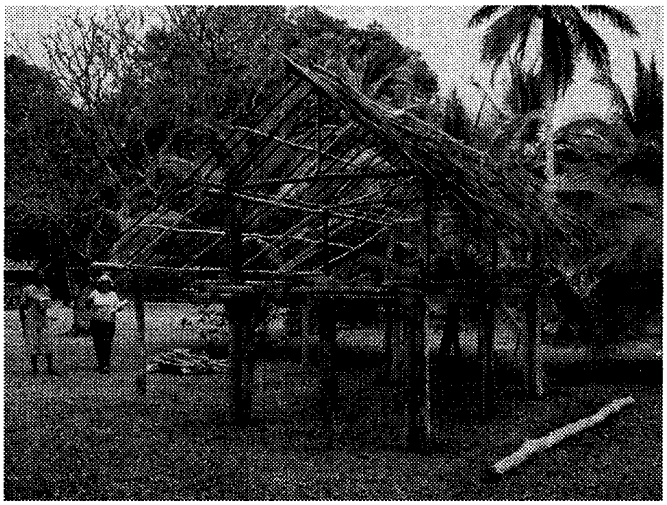


写真3　Sのヤムハウス

ということだったが、ヤバム島で聞き取った、「嫉妬を避けるためにヤムハウスを隠す」という考え方とは完全に対極にある建て方のように見受けられた。

また、ヤバム島においては、ヤムハウスは本来、タネイモの運搬の便のために畑の近くに建てたいのだが、盗難が心配なので家の近くに建てるということだった。ヤバム島でただ一軒、畑の近くに建てられていたGのヤムハウスには、厳重な鍵が取り付けられていた（高橋他　二〇〇七、八三頁）。しかしパヒレレ島では、「盗難が心配だ」という話は聞かれず、畑近くに建てられたOのヤムハウスも、とくに鍵などはついていなかった。また、集落内にヤムハウスをもつTは、タネイモ運搬に不便なので近々畑の近くに建て直すのだと言っていた。

③　二島の事例を比較して

二島のヤムハウスを比較してみると、地理的にも社会的にも近い関係でありながら、ヤムハウスの背景にある考え方にはかなり違いがあることがわかった。タネイモの倉庫としての意味合いが大きいという点は共通しているが、しきりに盗難や嫉妬を警戒するヤバム島の考え方に対し、パヒレレ島ではほとんどそうした警戒感が見られず、Sの大型ヤムハウスなどは、むしろ近隣にまで見せつけているようにすら思える。これはやや、トロブリアンド諸島で知られる、見せるヤムハウス（淺川　一九九一）の感覚に近いように思える。

パヒレレ島は、後述（根岸）されるように、物質文化もヤバム島より古いものが残っており、文化の伝統性がより強いことが感じられる。そこから考えると、大きなヤムハウスほど見せびらかすように建てるというのは、より伝統的なやり方なのかもしれない。あるいは、パヒレレ島はヤバム島と比べて農耕生産が豊かなこと、またヤバム島でも、土地所有者で良質な畑をもつCは、ヤムハウスを公道に見えるように建てていたことなどを考え合わせると、豊かな者は逆に盗難や嫉妬を恐れないのかもしれない。今後調査例を増やし、ヤムイモ生産がとりわけ豊かだというノルマンビー島の例などを見ていくことで、より確かな解釈をう

ちたてていけるものと思う。

（3）まとめ―生業をめぐる社会について

二〇〇六年度の調査は、二〇〇五年度のヤムハウス調査に加えて、食料生産の手段である焼畑や、その基盤となる土地所有の問題、また調査地にもパヒレレ島を加えて、より広い視野で実施した。

前回の調査で、調査地域の社会は〝日〟ベースの生活サイクルで生業戦略を行う〝多様性栽培〟社会であること、またヤムハウスは主にタネイモ倉庫で、食料庫としては一年の限られた時期しか機能しない一過的な貯蔵施設であることが観察され、貯蔵施設の存在イコール長期計画的な食料利用と考えがちな考古学的解釈を見直す必要があることが提示された。

今回の調査ではさらに、ヤムイモをはじめとした食料を生産する焼畑そのものが、一過的なものであることがわかった。焼畑としての土地利用は、土地の所有や使用、その相続などの問題とはまったく別レベルで動いており、手続きもそれらと比べてきわめて簡易である。また、焼畑に関する相続の対象は土地そのものではなく、畑づくりのノウハウといったソフトの部分や、撒くべきタネのみというのが興味深い。島の「旧家」的な土地所有者は、所有する土地の中で自由に良い焼畑ができるという事実もそのステイタスの一部に入っているようだが、良い焼畑を持っているからステイタスがあるということではない。焼畑はあくまで生業戦略の部分に過ぎず、また流動的なものであるという〝多様性栽培〟の特性がここにも現れているように思われる。

ヤムハウスについての考え方においては、ヤバム島とパヒレレ島で、その地理的・社会的な近さにも関わらず、違いが見られることがわかった。さらに周辺のほかの島や、今年度新たに調査を始めたパヒレレ島での調査を進めることで、こうした考え方の違いと生業のあり方、文化背景の相互の関わりについて、〝多様性栽培〟社会の理解を深めていきたいと考えている。

（細谷　葵）

（4）Yalasi Stone について

Iabam 島には島民の間で Yalasi Stone（ヤラシ・ストーン）と呼ばれる石柱がある。この石は島南西部の Tupawaya 付近の墓域に存する。法量は最大長二一〇㎝、最大幅四二㎝で、安山岩製と考えられる。島民の話では、石が自ら島へ上陸したという伝承が残っているが、Yalasi Stone に関する口碑・伝承の類について詳細は不明である。Yalasi とは現地語である Tawala（タワラ）語で西を指す

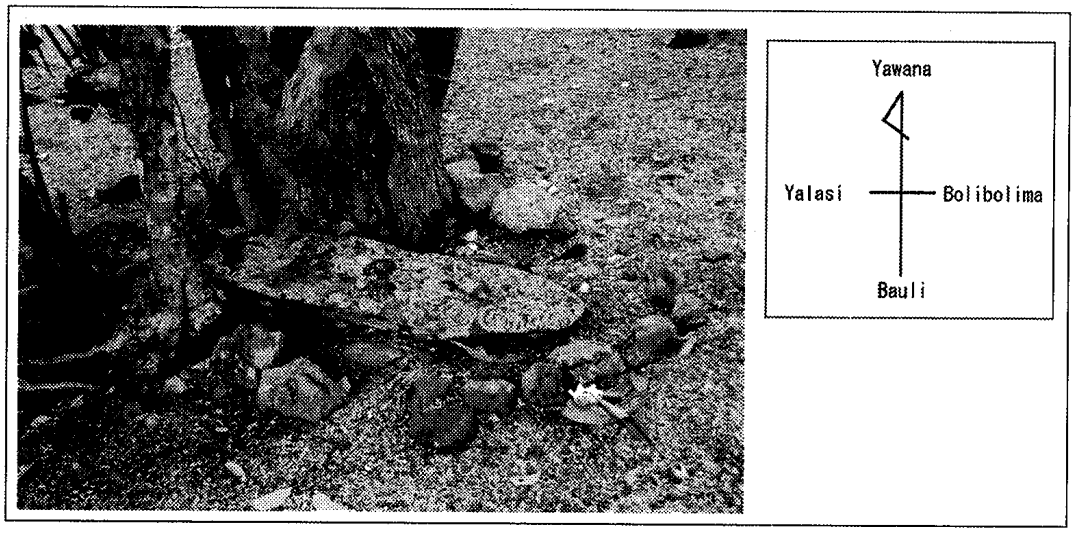


図2　Yalasi Stone と Tawala 語の方位呼称

ことから西方に由縁する可能性が高い（図2参照）。

当域一帯では、墓域を石や大型の貝殻などを用い円形に囲み、他の場と区別していることが多く、さらに墓域内の個々の墓についても同様な方法を用いて区別している。この傾向はYalasi Stoneが位置するTupawayaにおいても同様であり、当該資料自体も墓域内に存する。したがって、Yalasi Stoneが墓域内において何からの位置づけがなされていると考えられる。同時に、安山岩が本島から産出せず、また転石を含め島内においても皆無であったことから、Yalasi Stoneが他所から持ち込まれた可能性がある。

（井出浩正）

3．二〇〇六年度パヒレレ島の調査

（1）パヒレレ島の概要

パヒレレ（Pahilele）島は、ニューギニア本島東端に突き出た半島の先端であるイーストケープから、南南東に約一〇km海を渡った地点に位置する。前稿で触れたヤバム島から南に約二・三km離れているが、両島の間にやはり珊瑚礁で囲まれた小島が複数並んでおり、これらは同一の火山帯に沿って形成された小群島だと考えられる。地質学的にもヤバム・パヒレレ島は同一の特徴を持つと分析されており、これらの小群島はobstruction Islandsと記載されている（Bleeker 1988）。

パヒレレ島の詳細な地図は発行されておらず、正確な外形を記すことができない。今回実施したハンディGPSによる簡易測量によれば、南北約八〇〇m以上、東西は最大約二五〇mを測る。細長い菱形をなすが南半の方は丸みを帯びる。島の南半分は玄武岩を主体とする低平な丘陵とな

り、斜面などを利用して畑作が営まれている。南海岸は岩礁となるが、北・西・東海岸の一部には砂浜が広がり集落地として利用されている。最も広い砂浜が展開する北海岸が港である。

島民の使用言語は、イーストケープ・ヤバム島と同じくタワラ（Tawala）語である。人口規模が二〇人程度で一定していないのは、ヤバム島・イーストケープと親族関係の面で関連が深いこともあり、頻繁に人員の移動があるからである。生業形態（農業・漁業）はヤバム島と同一である。

畑の所有関係は両島をまたぐ形で成立している場合もある。キリスト教の教会はパヒレレ島にはなく、礼拝などの公的行事はパヒレレ島民がヤバム島まで出向く形で行われる。ミルンベイ州政府が任命する行政単位の管理者（カウンセラー）も、両島まとめて一名任命されるものであるから、両島は、政治・経済的に相互関係が深い「兄弟島」（ヤバム島での聞き取り調査による）と言える。

高床式住居・ヤムハウスと呼ばれる高床式倉庫・炉を持つ台所・燻製小屋・ブタ小屋などが分布する、集落（hamlet）が複数存在している。集落同士が若干距離を置いて分布しているのはヤバム島と共通するが、異なる点もある。つまり最も多く集落の分布する島北岸部では、大型の貝を外周に配した円形構築物を中心に各集落が配されているのである。この構築物の中心には大木が植わっている。調査期間の制約もあり、この構築物の名称や機能については聞き取り調査できなかった。木の根元を貝で囲むという習慣はヤバム島でも見られるが、パヒレレ島のこの構築物の規模が最も大きい。この構築物の性格がどんなものであれ、海岸線状に建造物を並列させるミルンベイ州の伝統的な集落配置パターンからすれば、パヒレレの例が異質である事は間違いない。しかしこれが地形状の制約によるものか、別要因によるものかは分からない。（根岸　洋）

（2）物質文化（土器棺墓・木製品）

日常生活域から離れた場所に、古い習慣[1]による墓域を見ることができた。周辺に骨片が散在する土器棺墓である（図3）。現在は行われていないこの墓制は、昨年度ヤバム島でも聞き取り調査できたように、最終工程で頭蓋骨を取り外す再葬墓である。この墓は土器を逆位に据えた土壙墓であり、白骨化した遺体から頭蓋骨が外された後のものと考えられる。聞き取り調査の成果によれば、この墓は現代の最も若い夫婦から数えて、三世代前の人間が葬られたものであるらしい。土器は現在製作されているものと同じく鉢形であるが、サイズが小さく施文域も狭い上、胴部に屈曲がない。また大きな特徴として、やや折り返し口縁状に

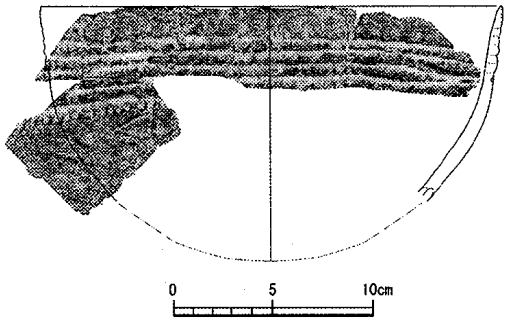
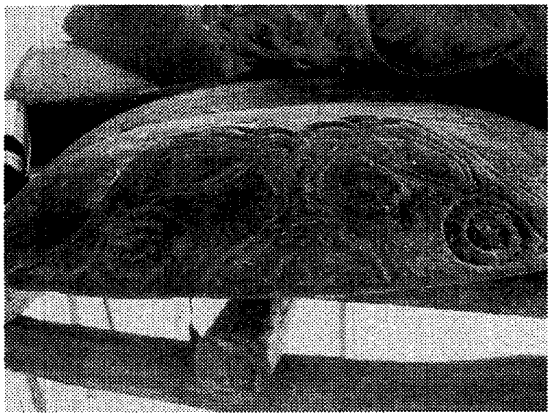
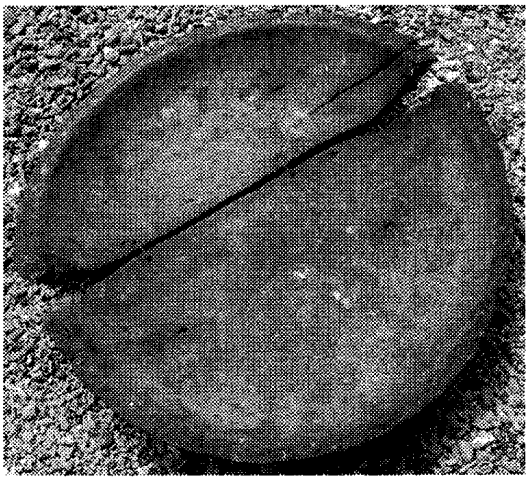
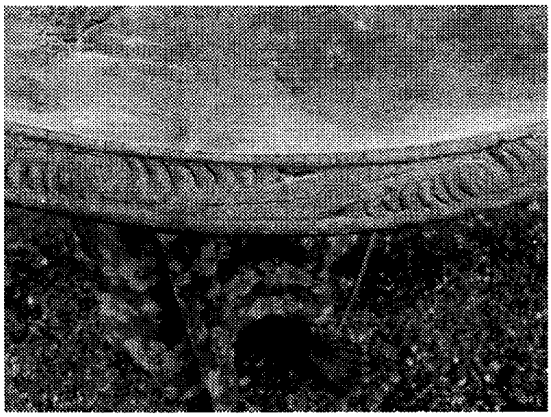


図3　土器棺墓（パヒレレ島）







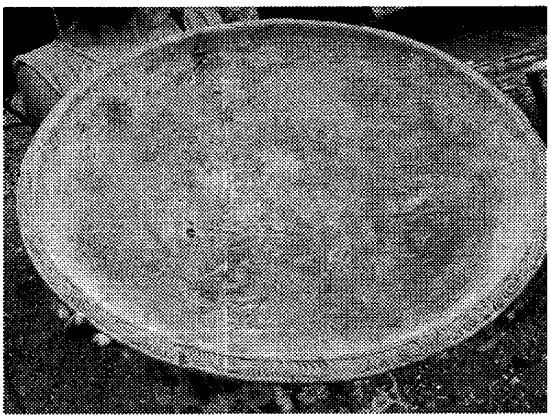


図4　木製鉢（パヒレレ島）

なっている点がある。同種の土器破片はヤバム島でも採集されており、三世代前より以前に製作された土器が持つ特徴[2]である可能性が高い。

他の物質文化としては、幾つかの文様が彫刻された木製鉢四点がある（図4）。現在は殆ど製作・使用されていないらしい。この種の器形や文様を持つ木製鉢は二〇世紀初頭の民族誌に多く登場するが、プラスティック製・陶製の皿がある程度普及した現在は、継続的な製作地を探すこと自体困難であろう。口縁部に彫刻される連続S字文は、ミルンベイ州の木製品製作文化に共通する伝統的文様である（Lewis 1973 [1925, 1931]）ため、少なくともミルンベイ州以外の遠隔地から搬入されたものではないと考えられる。しかし本製品の胴部に彫刻された、木（もしくは何らかの植物）と左右に巻貝（？）を配した文様は、これまで類例が報告されていない貴重な例である。パヒレレ島或いはイーストケープに伝わるトーテムなどを示した文様であろうか。

二日間のみの予備的調査であったため、親族・土器製作・生業形態などに関する基礎的調査ができなかった。しかし短期間にも関わらず、ヤバム島やイーストケープでは観察できなかった物質文化を確認できたことは意義深いと言える。来年度以降、パヒレレ島に再び調査に入り、ヤバム島との関係性を総合的に明らかにしていきたい。

（根岸　洋）

4．二〇〇六年度　イーストケープ（East Cape）の調査

昨年度、ミルンベイ（Milne Bay）州ヤバム（Iabam）島における調査の結果、ヤバム島はニューギニア本島東端のイーストケープ地方との密接な関係が確認された（高橋他　二〇〇七）。イーストケープ地方は、マリノフスキの研究によって知られるクラ交易のクラリングにも含まれる地域であり、今後の調査・研究においても拠点となり得る重要な地域である。そこで、今年度調査では今後の調査の基礎資料とすべく、親族調査、現地語でトレハ（Toleha）と言われる葬式の実見、土器製作の実見、GPSを用いた集落配置、集落構造の把握を主に、聞き取りとあわせて調査を行った。

（1）集落配置と集落構造

ア、イーストケープ地方の概要

イーストケープ地方は、ミルン湾を挟む北側の半島の最東端に位置する。州都アロタウ（Alotau）から東へ約50kmの地点にあり、行政上の区分であるミッションのひとつ

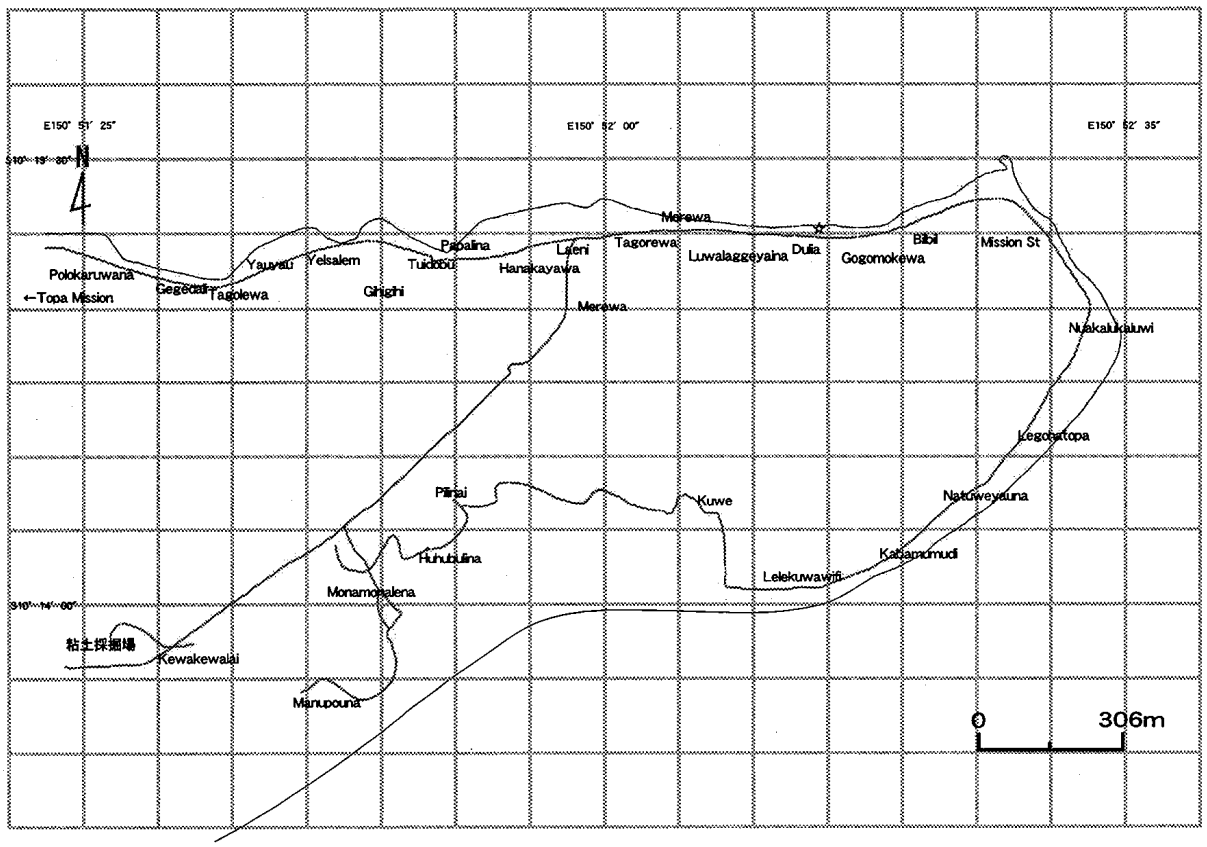


図5　ケヘララミッションの集落配置

である。半島の最東端から西へ約2kmまでの範囲を含み、東西に細長い形をしている。アロタウからイーストケープまでは計三一のミッションがあり、その中に更に集落やクランが存在する。現地の言葉ではケヘララ（Kehelala）ミッション、あるいは後述するクランの名前をとってヘヘゴ（Hehego）ミッションと呼ばれる地域である。集落は半島を囲むように海岸線沿いに位置しており、内陸部は丘陵地で畑として利用されている。

イ、集落配置と集落構造

イーストケープ地方には、計二四の集落（hamlet）とミッションの管轄による学校が一つ存在する（図5）。GPSによる記録で、建造物は計二八九軒確認された。その内訳は住居（母屋）一一三軒、炉を有する台所二四軒、仕事場五軒、物置一四軒、ヤムハウスと呼ばれる高床式倉庫四二軒、教会及び学校の施設三三軒、その他（属性不明含む）五八軒③である。一つの集落には二～一〇世帯が生活しており、比較的大きい集落や二、三地域に分かれて存在する集落もある。基本構造は住居、キッチン、仕事場、物置、ヤムハウスで、住居は夫婦や家族など二～三人が定員となる大きさのものが多い。キッチン、物置、ヤムハウスは一集落に一～二軒で集落の居住者もしくは親族間の所有とい

う色合いが強い。

図5を見ると分かるように、集落は多くが半島を囲むように位置している。半島の南部は丘陵地から続く崖が伸びており、内陸に集落が営まれる。内陸部の道は林道のようなもので、車で入っていくことは不可能である。そのため、集落も住居、キッチン、物置、ヤムハウスが一セットある程度の小規模なものが多い。一方、半島北側はアロタウから続く整備された道沿いに集落が並んでおり、集落間は垣根を設けることで境界としている。住居とキッチンは多くが横並びで建設されており、ヤムハウスは幾分離れた丘陵部に近いところに立てられることが多いようである。

そのため、集落は海岸部から丘陵地へのびるように縦長に営まれるものが多い。これは土地所有権との関係が強いようである。イーストケープ地方の土地所有の観念として、現地の言葉で「バラバラーナ（Balabalana）」と呼ばれる土地がある。この土地は、山を越えた半島の反対側の土地のことを指し、かつては、集落の土地として所有権が続いていたとのことである。イーストケープ地方にはかつてノルマンビー（Normanby）島をはじめ、数回に渡って移民がやってきており、その際には各集落のリーダーの話し合いによって土地が与えられた。このバラバラーナという仕組みはその際の基準となっていたようである。聞き取り調査によって、移民や土地の譲渡による比較的新しい集落と、古くから存在する集落とが存在することが明らかとなった。後述のクランの広がりとあわせてみると、このバラバラーナという仕組みに基づいたと思われる集落配置が確認できる。

なお、丘陵部に作られる畑の範囲やその所有に関しては、今回は調査することができなかった。集落内の居住地の広がりと合わせて、今後の課題である。

（2）親族調査

集落を記録する過程で、居住者の親族関係、移住、クラン、村の歴史などに関して聞き取り調査を行った。ここではインフォーマントが生活しているドゥリア（Dulia）村の事例を中心に報告する。

ア、土地相続

ミルンベイ州に於ける親族調査については、セリグマン（Seligmann 1910）の先行研究があり、トーテミズムを伴う母系制社会であることが確認されている。今回の調査でも、当時と比べ幾分形骸化しているものの、基本的には土地相続は母系を通じて行われるという原則が守られていることが確認された。土地の相続権は母から娘（多くは長女）

に受け継がれる。息子にはその土地の居住権は認められるものの、土地相続権が受け継がれることはない。インフォーマントは現在ドゥリア村で生活しているが、これは妻がドゥリア村出身であるため、居住を許されているという。インフォーマント自身はノルマンビー島の出身であり、妻が死んだ場合にはノルマンビー島へ帰らなければならない。居住権は埋葬においても同様の効力をもつ。たとえば、インフォーマントの長男は、牧師として様々な地域を歩いていたようであるが、亡くなったためその遺体は現在ドゥリア村に埋葬されている。

親族調査の結果、ドゥリア村ではインフォーマントから見て三世代上まで遡ることができた。一番上の世代の女性には二人の姉がいるが、その二人には男子しか生まれなかったため、ドゥリア村における系譜は途絶えたという。

表4

clan	totem(bird)	origin	hamlet
Hihiyaura	Takowa		Gogomokewa
			Melewa
		Gegedari	Lelekuwawihi
			Jerusalem
			Gegedali
			Polokaluwana
Modewa	Keroro		Nuakarukaruhi
			Hanakayawa
			Luwarageyaina
			Dulia
Hehego	Gabubu		Bilbil
			Legohatopa
Tagolewa	Binama	Natuweyauna	Kuwe
			Kabamumudi
			Tuidobu
			Gihigihi
			Natuweyauna
			Manupouna
			Tagolewa
Yauyau	Magisubu		Yauyau
			Monamonalena
			Huhubulina
			Pilinai
			Papalina

イ、クランとトーテム

イーストケープでは五つのクランが確認された（表4）。いずれも鳥をトーテムとするバードクランである。イーストケープの集落は多くが同一の親族集団によって形成されている。その為、各集落はリネージのようなまとまりを示しており、通婚が禁止されている。また、他地域から来た移民によって作られた村は、他の村から土地をもらって作られたものであるため、それらの村はもとは一つであるとして、やはり通婚が禁止されてい

る。

一方クラン内での婚姻は現在は可能であり、幾分形骸化されているようである。クランは後述のトレハの際に食料を持ち寄るなどお互いに協力関係にある。各村のチーフはその村の系譜を持つ最年長の男性が勤め、クランのチーフはその中で最も有力な村（多くは歴史の古い村）のチーフが勤め、現地の言葉でタニワガ（Taniwaga）と呼ばれる。昨年のヤバム島における調査と同様、トーテムに関するタブーは特に確認できなかった。

今回の調査結果を昨年・今年度のヤバム島・パヒレレ島の調査結果とつき合わせてみたところ、ヤバム島はケヘラミッションと、パヒレレ島は隣のトパ（Topa）ミッションとの関わりが強いことが伺えた。両地域と両島間の関係をより詳しく把握することが必要であろう。

（3）トレハについて

調査期間中、葬式にまつわる、あるいは死後の儀礼にかかわる儀式を観察する機会に恵まれた。こちらでは、そのような肉親の死に関わる儀礼をトレハと呼んでいる。イーストケープのハナカヤワ（Hanakayawa）と、隣に位置するバグマニ（Bagumani）村で観察することができた。いずれも多数の人々が集まり、ブタの供犠と皆での供食が重要なモメントであり（写真4、5）、その折に大型の土器が使用されるのである。トレハでは、多くの人々の食事を同時につくらなければならない理由から、一様に大型土器が使用される（写真6）。バグマニ村では、地面におかれた三個の石を炉石として、大型土器を上に載せて、下から火を炊き調理をするのである。これら大型の土器は、その大半がワリ（Wari）島由来の型式、すなわちエンジニアリング・グループと呼ばれる土器型式である点は、一

写真4

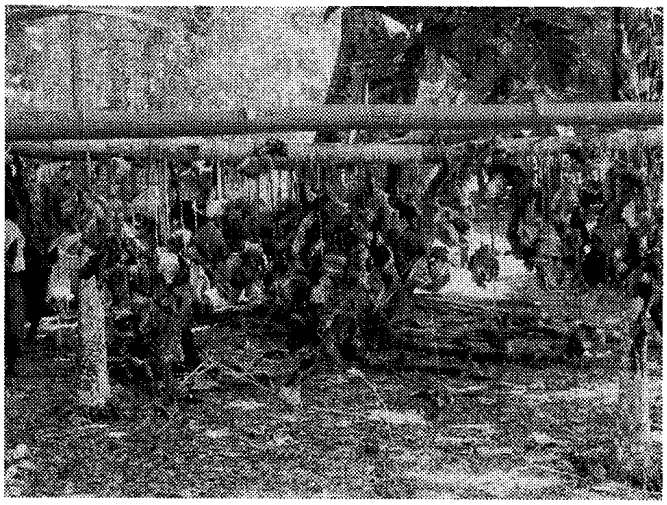


写真5

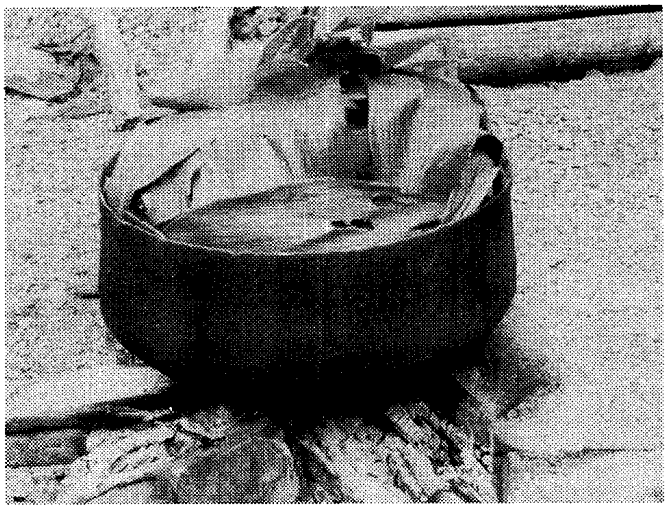


写真6

つの法則性といってもよいほどである。地元産のイーストケープ伝統の土器があるにもかかわらず、儀礼ではエンジニアリング・グループの土器が使われる理由は、その大きさにあるものと思われる。イーストケープ伝統では、器壁が厚すぎて重量が増し、大型土器は製作しにくいのであろう。その点、薄手に仕上げられたワリ島式の土器であるならば、大型に耐えうるのではないかと推測される。

金属の容器が一般の家庭にも普及し、手作りの土器などはそれほど日常生活には必要でなくなったように思えるが、どの家庭を訪ねても必ずそのような手作りの土器があるのは、おそらくトレハなどの儀礼時に使用することと関係しているのであろう。

（4）土器製作

今回の調査では、ケヘラミッションで計三回、トパミッションのバグマニ村で一回土器製作を実見することができた。本節では、この中で粘土採掘から焼成まで一連の行程を確認することができたケヘラミッションでの土器製作について、特に昨年度のヤバム島における調査との相違点に注目して報告をしたい。

ア、粘土採掘

ケヘラミッションの製作者が使用する粘土は、トパミッションとの境界に位置するケワケワライ（Kewakewalai）村が所有している土地にある。マーケットなどに土器を売り出した場合は売上の一部を所有者に支払うという。なお、トパミッションの製作者達はまた粘土採掘坑があるとのことであった。[4] 粘土採掘は女性の仕事で、男性は採掘坑へ行くことはできるものの、粘土を取ることは禁止されている。

粘土採掘坑は沢の近くの斜面にあり、地表面から深さ七五センチほど縦堀したものである（写真7）。上層には黒色土層が約一五センチ、黄白色土層が約三〇センチ堆積しており、その下ににぶい黄褐色の粘土層が三〇センチほど見えている。黄白色の層は土が乾燥しており、下のにぶい黄褐色の土のほうが粘性に富むため、そちらの方を使うと

いう。粘土は砂礫や砂利をやや多く含む。以前に採掘したと見られる痕が一メートルほど確認でき、我々が調査した際には、そこから更に七〇センチほど奥へ拡張して掘削を行った。採掘は鉄製のバンブーナイフなどを用いて行われる。採掘した粘土はヤシの葉で編んだバスケットに入れて持ち帰り、水をかけて安置される。

写真7

イ、製作

・下準備

土器製作はまず、採掘してきた粘土を板に上に少量づつ置き、木槌で叩いて砂礫や砂利を取り除くことからはじめる（図6—1）。この木槌で叩く行為は、昨年度のヤバム島の調査ではみられなかった点である。しかし、今回土器製作を行ってくれた製作者三人に共通するものであり、先行研究でもその様子は触れられており（May and Tuckson 1982 p103）、イーストケープ地方の伝統的な方法であると考えられる。粘土を叩く際は、後述する粘土紐を作成する板とは異なり、専用の船底形の木の上で行っていた。先行研究では粘土を叩くのは古いカヌーからとった木の上で行う（May and Tuckson 前掲書）と書いてあり、更なる聞き取り調査が必要である。

・成形

製作はまず、粘土を適量ちぎり、板の上で転がして計一〇㎜ほどの丸棒状の粘土紐を作成し、一端を丸めて底部を作出する。それを足の間に挟みこむようにして安定させ、巻き上げにより底部から胴下半部を作成していく（図6—2）。巻き上げの際には、丸棒状の粘土紐を押し付けるようにして作成していくため、幅一〇㎜、厚さ五㎜ほどの扁平な粘土紐が巻き上げられていく（図6—3）。ある程度巻き上げたら、底部を皿の上に置き、引き続き粘土紐を巻き上げていく。胴下半部までの作成が終わったら、後述の調整を施す。調整を施した後、輪積みによって胴部上半を作成していく（図6—4）。胴部上半から剄部にかけては屈曲する器形が一般的であり、屈曲部以降は内径接合によって輪積みをしていく。輪積みが終了すると、再び調整が施され、数時間乾燥させた後、施文を行う。

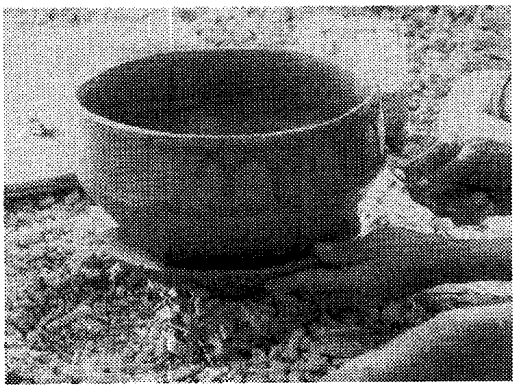
1.下準備（砂礫の除去）

2,巻き上げによる成形

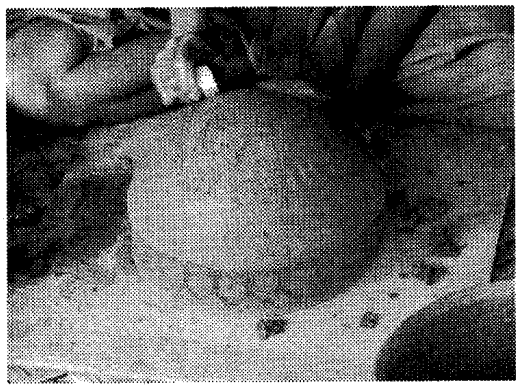
3.皿の上での成形

4.輪積みによる成形

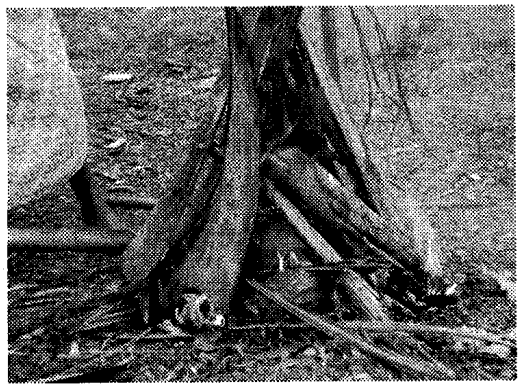
5.器面調整



6.施文



7.底部調整



8.焼成

図6

・器面調整

調整はまず、指によるナデを縦方向に施して輪積み痕を消していき、その後貝殻を用いて内面を削るようにして調整を施す（図6―5）。調整はまず内面から行われ、続いて外面の輪積み痕を同様に指と貝殻で消していく。その後、再び貝殻で内面にケズリ調整を施して、厚さを調整していく。これらの調整は全て皿の上に載せたまま行われる。その為、胴下半部から底部にかけての輪積み痕は、後日ある程度乾燥が進んでから、土器を逆位に置いて水をかけながら調整を施す（図6―7）。この点は昨年度のヤバム島における調査とは異なる点で、先行研究でも報告はされていない。底部の調整を実見できたのは一度だけであったので、これがイーストケープにおける伝統的な手法であるかは更なる調査が必要である。[5]

・施文

施文は貝殻と数本単位の木製の櫛歯状工具を用いて行われる。まず貝殻の縁辺を屈曲部に押し付けることで区画となる文様を巡らせる。その後上半に櫛歯を用いて単位文様を数単位描いていく（図6―6）。そして数日乾かして焼成へと移る。

・焼成

焼成は野焼きで行われる。まずヤシの葉やバナナの葉、枯れ木などを集めて火をつける。ある程度火が大きくなったら、土器に少量の水をかけて火の中に逆位に設置し、土器の周りをヤシの葉で覆ってゆく（図6―8）。周りを覆っているヤシの葉が燃えて灰になったら焼成は終わりで、棒で土器を火の中から転がし出して冷ます。焼成は火をつけてから約二〇分ほどで終了する。

ウ、土器製作者に関する聞き取り

親族調査において、特に重点をおいたものに土器製作者の系譜がある。土器の変化を追う際に、製作技術の伝承などが重要であると考えるためである。

今回の聞き取り調査では、計七世代分の調査データをそろえることができた。その中で、土器製作に関しては母や祖母といった血縁関係にある者、義母など内縁者から習うことが多い。しかし、母が早くに亡くなった場合や、皆が集まって作る場合などには友人の母など血縁関係にないものから習うこともある。また、学校に土器製作者が行き、若者に製作技法を教えることもあるという。

今回の調査で、イーストケープ地方で製作された土器のほかに、ミルンベイ州の南側に位置するワリ島からの搬入品が多数確認された。ワリ島の土器のほうが器壁が薄く大型のものが多く、短時間で多くの調理が可能であるため、

トレハなど大人数分の調理が必要な際は好んで使用されるという。今回聞き取りを行った土器製作者は、母親がケヘララ出身、父親がワリ島出身のため両方のタイプの土器を作ることができるという。しかし、ワリタイプの土器を作るにはワリ島の黒い粘土が必要なため、ケヘララの地では作らないとのことであった。また、パヒレレ島ではトパミッション出身の女性でワリタイプの土器を製作している人物がいる。文様パターンに関する聞き取りでは、基本的には教わった文様をそのまま使い、自ら文様を作ったり、変えたりすることはないという。しかし、中にはケヘララの製作者が作った土器でありながら、ワリ島の土器の文様パターンと思われるものを施文している土器も見られ、文様の変化に関しては今後の課題といえる。

今年度の調査によって、イーストケープとヤバム島・パヒレレ島は土器製作者間でも親族的なつながりがあることが判明した。そのうち、前述のパヒレレ島に住む女性の妹でトパミッションに住む女性は、ワリタイプに近い文様を土器に描きながらも、ワリタイプは作れないと言っていた。同じ母親から製作技術を習っているはずの二人の間で、一方はあるタイプの土器を作ることができて、もう一方はできないという事象を確認できた。今後の調査により、土器製作技術の伝播、変容を解明する手がかりを得られるかもしれない。

（中門亮太）

おわりに

今回ここに報告した調査は、土器型式の成立を前提にして、土器の生産と、拡散、その結果としての土器型式の分布という考古学的事象を説明するためのモデルを構築する上で大変重要な意味を持つものであった。そこには今では失われた人間の行動的側面や社会的側面が確実に介在したことが聞き取り調査によって伺われ、それらを分析することにより、縄文土器型式が成立する理由と根拠を推し量る民族誌的事実を明らかにすることができるであろう。自家消費的に手作りで土器を生産する社会において、母から娘への土器技術の継承、友人間を繋ぐ土器生産者間の血縁的ネットワークという社会的・行動学的根拠が判明しつつあるが、そのための基礎的データは今回の調査でかなり集積されたといってよい

さらに追加の研究を実施することで、ヤバム島やイーストケープ地域に同じ型式が生産され、拡散し、分布域を形成する考古学的根拠を得ることができるであろう。

今回の調査と本報告をまとめるにあたって、高橋は早稲田大学特定課題研究、私立大学高度化推進事業・オープン

リサーチセンターの整備事業（日本文化の源流に関する共同プロジェクト：大橋一章代表）を使用した。井出は早稲田大学特定課題研究（課題番号2007A-028）および高梨学術奨励基金による。根岸は平成一八年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による。

註

（1）土器を用いる墓制は、ミルンベイ州に限らず、パプア・ニューギニア各地で行われてきた歴史的なものである。特にミルンベイ州では一九七〇年代に至るまで残り、各地で報告されている。最近、主要な例を集めた集成論文が出版されている（Bedford and Spriggs 2007）

（2）この内の幾つかの特徴は、イーストケープ周辺と類似した製作伝統を持つパナヤティ（Panaeati）島において1930年代に報告されている（Tindale and Bartlett 1937）。

（3）その他の建造物としては、燻製小屋、ゲストハウス、店舗などがある。

（4）トパミッションで土器製作を実見した際に使用されていた粘土は、ケヘラミッションのものより黄色味を帯びており、砂礫などの不純物も少ないものであった。

（5）このような底部調整の方法はトゥベトゥベ（Tubetube）島で例が知られている（May and Tuckson 前掲書 p84）が、その際土器を逆位に設置するかは不明である。

文献

Bedford, S. and Spriggs, M. 2007 Birds on the rim: a unique Lapita carinated vessel in its wider context, *Archaeology in Oceania*, 42-1

Bleeker, P 1988 *Explanatory notes to the soils map of Papua New Guinea*, Natural Resources Series No.10, Division of Water and Land Resources, CSIRO

Lewis, A.B. 1973 [1925, 1931] *Decorative art of New Guinea: Incised Designs and Carved and Painted Designs from New Guinea*, Dover Publications

May, P. and Tuckson, M. 1982 *Traditional Pottery of Papua New Guinea*, University of Hawaii Press

Tindale, N.B., Bartlett, H.K. 1937 Notes on some clay pots from Panaeati Island, south-east of New Guinea, *Transactions and Proceedings of the Royal Society of South Australia*, vol.LXI

浅川滋夫、一九九一、「高倉の民族考古学」、直木・小笠原(編)『クラと古代王権』、ミネルヴァ書房

胡桃沢勘司、一九八七、「群倉考」、『物質文化』48、

高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋、二〇〇七、「パプアニューギニアにおける民族考古学調査（三）—ミルンベイ州イースト・ケープ周辺の調査概報—」、『史観』156冊

細谷葵、二〇〇七、「〝社会植物考古学〟の視点によるバリ島稲作の民族誌調査」、『東南アジア考古学』27